

タイトル「2021年度 人間学部」、フォルダ「大学 人間-心理学科」
シラバスの詳細は以下となります。

科目名	知覚・認知心理学 I		
英文科目名	Psychology of Perception and Cognition I	他学部他学科履修可否	○
担当教員	小林剛史		
対象学年	2年,3年,4年	クラス	1
講義室	C-202	開講学期	前期
曜日・時限	月3	単位区分	必,選択
授業形態	講義	単位数	2
キャリア該当科目			
備考			
ディプロマポリシー	<p>2. 心理学の諸分野の専門的知識と人間を科学的に探求するためのスキルを身に付け、これに基づいて現代社会の諸問題を主体的に発見し、心理学的に分析して解決に向けた視点や対応策を提供することができる。</p> <p>3. 自身の考えを他者に的確に伝え、問題を共有し、課題の解決に協働でとりくむためのコミュニケーションをとることができる。</p>		
授業の目的・到達目標	<p>知覚・認知は、感情や行動などとともに人間の心理学的理解において欠くことのできないものである。教育やカウンセリング、心理療法においても、脳科学と認知の知識の重要性はますます高まっている。一方研究現場では、心理学において蓄積されてきた人の認知過程における諸特徴が神経科学と融合し、かつてないスピードで研究が進行している。このように、教育現場、対人関係、職業場面において、神経科学と認知の知識の重要性が高まる一方で、新たな研究はめざましい速度で進行しているのが、この分野の特徴である。</p> <p>本講義では神経科学と認知の重要な知見について、さまざまな視覚教材を用いて学ぶことによって、心理学の諸領域の研究手法および理論等を理解し、心理学的な観点から心身の諸機能について理解する力を身につけること、人の感覚・知覚・認知・思考等の機序及びその障害の知識を身につけることを目的とする。</p> <p>到達目標は、1)人間の「こころ」の複雑さを高い共感性に基づいて多面的に捉えられるようになること、2)本講で新旧の諸領域の研究を理解し、「人」と対する職業や立場に就く人として不可欠な知識および姿勢・態度との関連について説明できること、3)多くの場面で人が陥ってしまう人特有の認知的傾向について説明し、これを日常場面で回避することができること、4)人の感覚・知覚・認知・思考等の機序及びその障害に関する基本的知識を説明できること、とする。</p>		
授業概要	<ol style="list-style-type: none"> ガイダンス：授業の進め方等 反転図形、錯視図形、変化盲、注意資源と神経情報処理 奥行き知覚、まとめあげる能力、大きさの恒常性と神経情報処理 トップダウン処理とボトムアップ処理と神経情報処理 変化の知覚、クロスモーダルな知覚と神経情報処理 痛みと妬みに関わる神経情報処理 陥りやすい考え方：多様なヒューリスティックと神経情報処理 原始的な感情と神経情報処理：扁桃体と感情、感情を失ったヒト 古い脳と新しい脳の相互作用 人間らしさを失った人 ～フィニアス・ケージの失ったもの～ 身体からの情報の重要性 ～脊髄損傷患者の心～ 初期経験が感情の発達に及ぼす役割と神経情報処理 人の感覚・知覚・認知・思考等の機序及びその障害 ミラーニューロンに関わる神経情報処理 自閉症と共感機能に関わる神経情報処理 		
学習演題（予習・復習）	<p>第1～5回目の予習として、知覚の機能について、配布された資料の次の授業内容に関する部分を予め熟読し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各90分）。</p> <p>第1～5回目の復習として、講義の後、配布された資料に授業内容で与えられた情報を加える形で授業ノートを完成させる（各90分）。</p> <p>第6～12回目の予習として、感情の諸機能について、配布された資料の次の授業内容に関する部分を予め熟読し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各90分）。</p> <p>第6～12回目の復習として、講義の後、配布された資料に授業内容で与えられた情報を加える形で授業ノートを完成させる（各90分）。</p> <p>第13～14回目の予習として、共感性の機能について、配布された資料の次の授業内容に関する部分を予め熟読し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各90分）。</p> <p>第13～14回目の復習として、講義の後、配布された資料に授業内容で与えられた情報を加える形で授業ノートを完成させる（各90分）。</p> <p>第15回目の予習として、担当教員に与えられた課題について考察し、疑問点等を授業前にノートに列挙しておく（各90分）。</p> <p>第15回目の復習として、講義の後、授業内で行われた説明を自身の理解のまとめあげる（各90分）。</p>		
授業方法	<p>面接（対面）の場合、プロジェクターを用いた視覚資料に基づく講義形式を主とする。受講者は授業内容に対する感想、質問等のリアクションを記述し、提出する（TEAMSを用いたオンライン）。担当教員は次回の授業で、リアクションに対してコメントを行い、相互交流的な授業を展開する。</p> <p>遠隔授業を実施する場合は、以下の実施形態をとる。本講は原則的に面接（対面）授業ですが、遠隔授業を行う可能性があります。この際、Teamsを用いたオンライン（リアルタイム）授業、あるいはオンデマンド授業を行います。具体的には通常授業と同等の要領でリアルタイムオンライン授業を行うか、授業動画を配信します。受講生はこのリアルタイム授業を受講する、あるいは動画を視聴し（教員が指示）、与えられた課題を行います。以上の方法で一部オンデマンド授業を行います。通常授業との内容的差違はほぼないものと想定しています。</p>		
成績評価の基準	<p>受講生は、毎回授業で課される課題に、授業内容に関わる感想、疑問点等を記述し、翌週、担当教員はこれらの内容に対して包括的に講評を行う。各授業の到達度はこのリアクションの記述内容によって評価する。学期末試験は論述試験を行う予定であるが、状況に応じて毎回の授業の課題内容を総合的に評価することで成績評価とすることも（教員が授業内で指示）。リアクションの内容および試験における論述内容をもって、授業の到達目標に対する到達度を評価する。評価配分はリアクションの記述内容が70%、学期末試験の成績が30%とする予定であるが、先述のように、リアクションの内容が100%となることもある。これについては授業内で指示する。</p>		
教科書	授業内で、独自に作成されたレジュメを配布する。		
参考書	「マインド・タイム」若波書店 ベンジャミン・リベット著「感じる脳」ダイヤモンド社 アントニオ・R・ダマジオ著「生存する脳」講談社 アント		

	ニオ・R・ダマジオ著
実務経験のある教員による授業	
実務経験の内容	
実務経験の当該科目への活用	